

# 大阪市立美術館所蔵『春日鹿曼荼羅』の成立と 春日明神の神託について

田 渕 花 歩

はじめに

これまで大阪市立美術館所蔵の春日鹿曼荼羅（以下、大阪市美本と称する）【図絵4】に焦点をあてた研究は、筆者が調べる限りでは石川知彦氏が当館に所蔵・寄託されている春日鹿曼荼羅について資料紹介を行った論考<sup>①</sup>と、筆者が昨年度（令和六年）の「大阪市立美術館紀要」第二十四号にて発表した研究ノートを挙げる程度である。本稿では昨年の研究ノートで触ることのできなかつた当時の信仰と本品の表現の特徴について考察を行う。

## 一、大阪市立美術館所蔵の春日鹿曼荼羅の表現について

現存する春日鹿曼荼羅はおよそ三十幅ある。春日鹿曼荼羅とは神護景雲二年（七六八）に常陸国（現在の茨城県）の鹿島神宮の祭神である武甕槌命が神鹿に乗り御蓋山にに向した伝承を描いた絵画である。そのため、背景として御蓋山が描かれことが多い。しかし、大阪市美本には御蓋山どころか背景が描かれていない。同様に背景が描かれていない春日鹿曼荼羅にMOA美術館本（十四世紀）、



【挿図1】重要文化財 春日鹿曼荼羅 奈良  
国立博物館所蔵 出典：ColBase

東京国立博物館本（十五世紀）や善根寺町春日講本（十七世紀）があるが、これらに共通する特徴は神鹿が全面に描かれており、来迎の様子描くという意図が少ないような印象を受ける。

大阪市美本には神鹿の下に、大きな鳥居が表現されている。鳥居を描く鹿曼荼羅としては、奈良国立博物館本（十三～十四世紀）【挿図1】も当てはまるが、御蓋山など春日の風景も表現されている。鳥居のみを描くことに大阪市美本の特徴がある。

神鹿の表現については、筆者の調べた中では唯一の表現方法がな

されている。多くの鹿曼荼羅では神鹿は左または右の側面から見た姿で描かれているが、大阪市美本の神鹿の体はほぼ正面を向く形で表現されている。身に着けている鞍に立つ榊の上にある円鏡は放射線状の九つの光を放つ類を見ない表現がされている。他の鹿曼荼羅では円鏡の中や周囲にホトケや梵字が表現されることが多いが、そのような表現は見受けられない。石川知彦氏が指摘している通り、榊の根本には、金泥塗の反花、敷茄子、緑青を賦彩した蓮弁、蓮肉といつたホトケの存在を表す台座が表現されている。

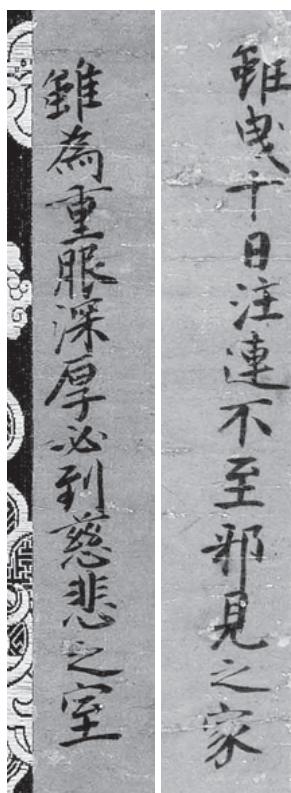
以上のことから、大阪市美本は一般に流布している春日鹿曼荼羅とは別系統であることをひとまず認めて良いであろう。

大阪市美本は画幅の両端には次に挙げる墨書が記されている。墨書は上段の神託と下段の発願文に分けることができる。まず神託【挿図2】を見よう。

雖曳千日注連不至邪見之家

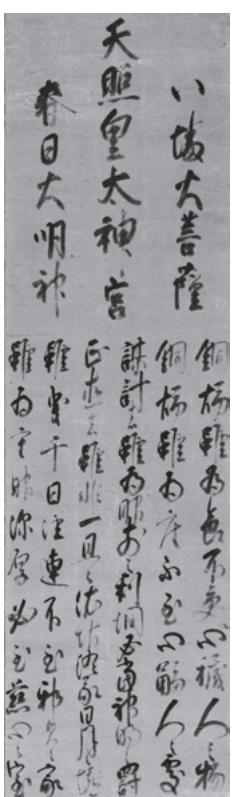
雖為重服深厚必至慈悲之室

(旧漢字は今日使用している漢字に改めた)



【挿図2】春日鹿曼荼羅  
大阪市立美術館所蔵

春日大明神の三社の神託を一幅に書いたものである。



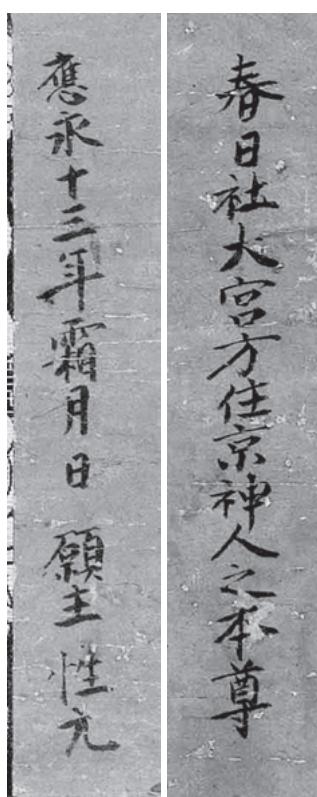
【挿図3】三社託宣 奈良国立博物館  
所蔵 出典：CoIbase

また、大阪市美本の銘文は下方に記されている墨書【挿図4】によつてこの作品の用途、製作時期と発願者がわかる。

春日社大宮方住京神人之本尊

応永十三年霜月日 願主 性元

(旧漢字は今日使用している漢字に改めた)



【挿図4】春日鹿曼荼羅  
大阪市立美術館所蔵

「神人」とは春日社司の被官として、有力社寺領に鎮守社神主兼莊官として常駐したものという。なかでも京都在住の神人を「春日住京神人」と呼んだことから、大阪市美本は彼らの本尊として制作さることによつてわかる。三社託宣とは天照皇太神宮、八幡大菩薩、

これが神託であることは、「三社託宣」【挿図3】と同じ文言が見え

れ、発願者の性元は京都にいる春日社の神人と推測できる。<sup>(4)</sup>

## 二、大阪市美本の神託について考える

さて、第一章にて大阪市美本には三社託宣に見受けられる春日明神の託宣文が記されていると示した。この春日明神の神託を含め三社託宣はいつ頃、成立したと考えられるだろうか。成立年代や成立地については平安時代末期や鎌倉時代など諸説あるが、広く定着をしたのは室町時代と考えるのが定説となっている。平泉澄氏の研究<sup>(5)</sup>によると宝徳十五年（一四五二）には『三社託宣』の存在の確認がされ、また応永二十四年（一四一七）頃成立の『醍醐枝葉抄』にも三社託宣についての記述がみえるから、遅くとも十五世紀初頭には成立していたという。<sup>(6)</sup>

大阪市美本の銘文に戻る。墨書に見える発願の日付は応永十三年（一四〇六）霜月（十一月）日である。応永二十四年（一四一七）頃成立の『醍醐枝葉抄』よりも十一年早く、春日明神の託宣が成立していたことになる。春日神鹿を描く大阪市美本では春日明神の神託を記せば十分であったと考えることができるが、一つの可能性として三社託宣として纏められる前に三社の託宣がそれぞれ別にまつられていた時期があり、大阪市美本はその時期の品と考えることもできるだろう。

さて、神託を読み下すと、「千日注連を曳くといえども邪見の家には至らず、重服深厚たりといえども必ず慈悲の室に至る」となり、対句となっていることがわかる。意味は千日間注連縄をめぐらしたところで邪見の家には（注連の力は）至らず、奥深くにあつても必ず慈悲の部屋には（注連の力は）届く、と解釈できる。「邪見の家」

という穢やかでない表現が見えることから、応永十三年頃に京都の春日神人の周辺で何らかの不祥事があつたと推測されるが、その手がかりとなる資料を『大日本史料』<sup>(7)</sup>に所収されている「荒曆」同年正月二十一日条に見ることができる。そこには、

正月廿一日、頭中朝将来、奉日祭事示之、仍謁之了、就其希代不思議事出来、所詮近衙使事公雅臣今度理運之間、定可被仰下歟之由、内々令用意之處三條中納言所召仕下女、四十許者也、於彼家中死去、然面未終間、命以前被取出之間、無觸穢疑之由、此朝令申之間、無子細之由相存之處、内府禪門官仕青女、廿許也、昨日俄在亂、称春日大明神託宣云、此家中已穢了、然而以汚穢不淨之身、可參勤祭礼使哉、太不可然云々、仍彼死人事令糾明之處、实自一昨日閉眼事切了、而翌日取出之、称不穢之由云々、○中略、去年春日祭ニ、公豊ノ下女月水ノ穢ヲ憚ラズ參詣セシコトニカ、ル、十二年十一月四日の篠ニ収ム、尤奇異不可說事也、雖未代神明冥鑑可恐可貴云々、

（旧漢字は今日使用している漢字に改めた）

と見える。これによれば、応永十三年（一四〇六）一月二十一日にこの年の春に行われる春日祭使に決まっていた正親町三条公雅、三条西実清家の下女が自邸で死去したため他所へ移し、穢れはないという申し立てをしたが、前日に正親町公豊の下女がにわかに狂乱し、春日大明神の託宣として、この家は不淨であると述べた。改めて調べたところ十九日に下女が死去していたことが判明したと見える。『春日祭』とは、嘉祥二年（八四九年）に始まつたとされる勅祭である。明治十九年（一八八六）以降は三月十三日（新暦）に統一されたが、それ以前は旧暦の二月と十一月の上の申の日に行われ

ていた。応永十三年十一月が描かれた大阪市美本に見える春日明神の託宣「雖曳千日注連不至邪見之家」「雖為重服深厚必至慈悲之室」は、その年の一月の不淨事件を受けての神託と解釈することができるだろう。「荒曆」の記録には託宣文についての詳細は記されていないが、下女が述べたという託宣文こそ、大阪市美本の墨書に見える神託文であつたと考えることはできないだろうか。大阪市美本は、

応永十三年（一四〇六）十一月の春日祭に際して一月に起きた不淨事件を祓い淨めることを願い、神人の性元が発願したと考えることができよう。

本来の春日鹿曼荼羅は、日常的に春日社へ参拝のできない貴族や春日講と呼ばれる地域単位で「講」を組み行われた春日信仰の本尊として礼拝の対象とされてきた。大阪市美本はこの信仰とは少し趣の違う制作過程であつたことを考慮すると、御蓋山を描かないといつたほかの春日鹿曼荼羅とは異なる表現もそれに起因していると推測される。大阪市美本は墨書以外に詳しい来歴が不明のため、すべて憶測の範囲を出ることはないと制作の背景としてひとつの指針を示すことができた。

### 三、今後の課題

以上、大阪市美本が制作された経緯について墨書が書かれた神託を手がかりに考察を行つてきた。また、墨書においても春日鹿曼荼羅は、春日社を直接礼拝する人々のために作られただけではない當時の人々の信仰に対する価値観を垣間見ることができる結果となつた。筆者の知る限り、これまで春日鹿曼荼羅や春日宮曼荼羅が制作された経緯や時代背景を考察した研究はなかつたが、応永十三年の

不淨事件などをきっかけとして新たな曼荼羅が発願されたことが分かった点は大きな収穫であると思う。本稿が春日鹿曼荼羅や三社託宣の研究に何らかの寄与があれば望外の幸せである。

#### おわりに

今回は、当館の所蔵する「春日鹿曼荼羅」について当時の春日信仰と曼荼羅の表現方法について考察を行つた。限られた初見であるが大阪市美本の制作された背景について少し考えを進めることができた。神鹿の特異な描かれ方について前年度より理解を進めることができ、作品の描かれた背景に大きな要因があることも判明した。今後さらに春日鹿曼荼羅だけではなく、春日信仰について解釈を進めるなどを今後の課題としたい。さいごに、垂迹思想や春日信仰に対する先行研究の浅学や考えの相違についてお断りするとともに大方の叱責を何卒頂戴したく存じる。

#### 註

- 1 石川知彦〈資料紹介〉「春日鹿曼荼羅の一、三の作例と春日本地仏」（大阪市立美術館紀要 第八号）大阪市立美術館 一九八八年）
- 2 「春日鹿曼荼羅」に関する情報は以下を参考とした。重富滋子「春日信仰における神鹿とその造形」（『跡見学園女子大学美学・美術史学科報（十六）』一九八八年）、松村政雄〈解説〉「春日鹿曼荼羅」（『國華 第八七一号』國華社 一九六四年）、景山春樹「春日の鹿曼荼羅—古代信仰の標型として—」（『國華 第九八一号』國華社 一九七五年）、伊藤久美「春日鹿曼荼羅図」（『國華 第一五三七号』國華社 二〇二三年）、「特別展春日大社 千年の至宝」（東京国立博物館 二〇一七年）、「国宝 創建一四五〇年記念特別展 春日大社のすべて」（奈良国立博物館 二〇一八年）

- 3 年)、「特別陳列 おん祭りと春日信仰の美術－特集 神鹿の造形－」(奈良国立博物館 一〇一〇年)
- 八木意知男『〔三〕社託宣』の研究と資料 (京都女子大学 二〇一一年一月二十五頁)
- 4 「春日神人」については以下の情報を主参考とした。永島福太郎『奈良』(吉川弘文館 一九六三年)、松村和歌子「春日の神人(祢宜)について」(『春日大社年表』春日大社 二〇〇三年)、「春日神人」『国史大辞典』(1101~1303頁 吉川弘文館 一九八三年)
- 5 平泉澄『中世に於ける精神生活』(至文堂 一九二六年)
- 6 前掲註4『〔三〕社託宣』の研究と資料(七、八頁 一〇一一年 参照)
- 7 東京帝国大学『大日本史料 第七篇之七』(八三九、八四〇頁 一九三七年)

### 【図版出典】

図1 重要文化財 春日鹿蔓荼羅(奈良国立博物館所蔵) 国立文化財機構  
所蔵品統合検索システム ([https://colbase.nich.go.jp/collection\\_items/narahaku/1182-0?locale=ja](https://colbase.nich.go.jp/collection_items/narahaku/1182-0?locale=ja)) をマリマハグレで作成

### 謝辞

本稿の執筆に際し、左記の方にご指導を賜りました。心より御礼を申し上げます。

奈良国立博物館中川あや教育室長、大阪市立美術館内藤栄館長